

【日時】2026年6月11日(木) 15:30-17:30

【場所】ハイブリッド開催(オンライン・対面の併用)

- 【次第】 1. 総会決議案
2. 今期成果及び来期計画
3. 意見交換

次第1については事務局から資料に基づき説明があり、特段の異論なく運営委員会として了承。次第2については、事務局及び各分科会等から資料に基づいて説明があった。次第3の意見交換における主なコメントは以下の通り。

＜インパクトの担い手の裾野拡大に向けた取組＞

- インパクト投資促進の鍵は、インパクトと経済的価値との接続にある。経済的価値との接続を整理する上では、量的な関係性の整理にとどまらず、時間軸や頑健性を考慮した整理が重要。また、インパクトは社会的価値にも影響するので、社会的価値そのものが企業価値創造の持続性や信頼性を高めるという認識を広めることが期待される。
- 企業価値は、企業・投資家・政策当局など、それぞれの文脈や立場によって意味が異なる。一方で、インパクトは、それら異なる文脈を「翻訳」し、共通理解を形成する概念となり得る。例えば、ステークホルダーバリューの文脈では、受益者をどこまで捉えるのか、創出されたインパクトがどのように経済的価値へ結び付くのか、さらに経済的価値と株主価値はどのような関係にあるのか、といった点を丁寧に翻訳していく必要がある。さらに重要なのは、「編集的翻訳」(異なる立場や背景を踏まえ、それらをつなぎ、新たな共通理解や価値創造ストーリーを構成するという意味での翻訳)を実践していくことである。企業価値との因果関係についても、データによる検証を重ねながら理論と実践を往還させ、その知見を企業・投資家・社会が共有できる価値創造ストーリーとして編集し、市場形成へとつなげていく「編集的翻訳」は、今後ますます重要な役割を果たす。
- インパクト投資の裾野を拡大していくためには、インパクト投資の基本的指針で重要な要素の一つとされている「意図」が重要。元来、企業の多くは、社会課題解決の意図を持って、出資者を募り、設立されたと認識。このような企業の主体的な意図を基に、明確な価値創造のストーリーを構築することによって、投資家だけではなく、企業内部でも理解を得られる。更に、インパクト投資を次のステージへ進めるキーワードは「レジリエンス」である。資本の効率性も重要だと思うが、現在でも持続している企業は、時代変化に応じて事業を変革し続けることで適応してきたが、そのような企業はリスク対応の観点からレジリエンスにも考慮してきており、重要な概念だと認識。レジリエンスは経済安全保障の議論とも重なる概念。
- 環境・社会制約が強まる中で、従来の分散投資や企業単位の投融資を前提とした枠組みのままでよいのかを改めて考える必要。先ほど、紹介のあったブレンデッドファイナンスにおいては、欧米では当たり前のように行われており、このような海外での先進的な取組の知見を導入していくためには、受け身ではなく、日本の取組を積極的に発信してその反応を得ることや、積極的に取材していくことが重要。インパクト投資にとどまらず、システムチェンジやシステムリスクへの対応までも視野に入れていく必要。
- インパクトと企業価値の因果関係をロジックモデルやストーリー等を活用することで編集的な翻訳することも重要だが、経営判断・投資判断への接続を明確にすることが中長期的な価値創造に繋がると考える。加えて、AIリスクを考慮しながら、AIをインパクト分析や投資判断に活用していくことが今後の重要な論点である。
- エネルギー安全保障や気候変動対応、地域経済維持など、課題ごとに異なるアプローチが必要であり、従来のデット的な関与だけでは解決が困難。課題解決に繋げるには、エクイティ的な関与やオペレーションを担う役割の人を、金融サイドでも育てていくことが必要。

- インパクト投資の本質は、資金そのものではなく、資金の出し手やその行為、資金を投じた先に起こることに価値や意味を持たせることだと認識。社会課題解決は本来、価値があるものだが、社会課題解決が自律的な収益へ繋がらないのは、経済的価値に繋がれることを意識していないことが挙げられる。そのため、金融教育やブランディングを通じた意識の浸透と、官民連携が不可欠。
- 金融機関として集中投資・リスクテイクの重要性に賛同しつつ、投資家層の裾野拡大も同様に重要な取組と考える。インパクトと経済的価値の接続に加え、さらに一歩進んで、投資としての財務的リターンを可視化することによって、投資家の選択肢を広げ、インパクト投資全体の拡大に繋がると考える。
- インパクト投融資の推進において、翻訳だけではやや不十分である。インパクトと経済的価値の繋がりには、直接的なものだけでなく間接的・部分的なものもあり、事業会社と投資家の間で重視する点や時間軸なども含めて、すり合わせを進めていく必要。インパクト投融資を推進するためには、事業会社と投資家の意識や価値の見方を変えていくところまで踏み込む必要。
- 中小企業支援の現場ではエクイティの重要性を説明しているものの、依然デットが中心。今後、本日も報告いただいた内容も活用しながら、しっかりと説明をしていきたい。また、インパクトの担い手として大学等の有効活用も重要な視点と考えている。

<海外への発信・貢献>

- グローバルアドバイザーパネルでは、海外の実践者から、システム上の Friction（摩擦）を捉え、新たな市場（New Beta）を創出していく投資の考え方や、地域・コミュニティを起点としたシステムチェンジの実践など、多様なアプローチが紹介された。日本からは、異なる価値観を対話を通じて翻訳し、関係性を再編集しながら変化を生み出していくアプローチを紹介し、海外の登壇者からも高い関心が寄せられた。海外の先行事例を一方向に学ぶのではなく、それぞれの実践の共通点と相違点を持ち寄り、相互に学び合うことの重要性を改めて認識した。今後は、分科会間の連携に加え、日本からの発信と海外との継続的な対話・連携を一層強化していくことが重要である。
- 日本のインパクト投資はこの2〜3年でグローバル最先端レベルに追いつき、海外からも高いリスペクトを得ている。一方、個社単位のポイントソリューションでは根本的な社会課題解決には不十分であり、システム分析などの深い社会課題の分析が必要。システム分析などを行うことによって、市場の新しい機会やイノベーションの創出に繋がるため、海外から学ぶべきことは多い。

以 上